

異端審問・マラーノ・新世界・イエズス会

—スペインの<反>宗教改革とルネサンス期イングランド—

荒木 正純

1. 結論

これまでわたしは、イギリス文学、とりわけシェイクスピアを中心としたイギリス・ルネサンス文学研究に関与してきた。この分野で、宗教改革が問題化されることがあっても、<反>宗教改革が問題意識にのぼることは、従来、ほとんどなかった。それも当然のことである。イギリスに<反>宗教改革とよべる事態はおこらなかつたからである。

イギリスが歴史上、宗教改革に関与したのは、エリザベスⅠ世（在位：1558-1603）の父であったヘンリーⅧ世（在位：1509-1547）の時代のことである。キャサリン・オブ・アラゴンを妻として、ヘンリーはスペインと結びつきをもち、ローマ・カトリックの熱心な援助者であった。その彼が、カトリックと縁を切ったのは、キャサリンと離婚しアン・ブリンと結婚するためであった、そう一般にはいわれている。（この政治的事情は複雑であり、ここでは扱わない。）これにより教会は、「英國における教会」（Church in England）から「英國の教会」、つまり「英國国教会」（Church of England）となつた。これは、消極的なプロテスタント化であった。しかし、この事態は「宗教改革」に他ならない。英語では Reformation といつてゐる。カトリック教は禁教とされ、同時に修道院が解体された。以後、エリザベス女王の腹違いの姉メアリー（在位：1553-1558）が国王になったとき、カトリックに再度改宗した時代、また、ジェイムズⅡ世（在位：1685-1688）がカトリック公認の方向性をうちだしたときをのぞけば、ずっとプロテスタントが支配的であつた。したがつて、チューダー朝期とスチュアート朝期を研究対象としている者にとって、<反>宗教改革が関心のそとにあつたのも、何ら不思議なことではない。

近年、歴史研究でも、政治・経済・宗教の体制的歴史を研究対象の中心にすえてきた「上からの歴史」研究ではなく、文化の研究、とりわけアナール派に触発された社会史

の研究が台頭してきた。ここでは、民衆の心的態度（マンタリテ）が問題視されるようになった。これは、歴史の変化層（相）を追求するというより、むしろほとんど変化のみられない層を追求する「下からの歴史」研究とされている。とすれば、エリザベス朝期の文学・文化研究にあってこの側面を追求するとすれば、それはピューリタンの精神、あるいは、プロテスタントの精神を追求するよりか、カトリックの精神を追求した方がみのりあることになろう。たとえば、この時期の魔女や魔術の研究をしようとすれば、はつきりとそうしたものの存在を否定するプロテスタントの心的態度ではなく、その存在を認めるカトリックが提供する心的態度を対象としなくてはならないであろう。実際、英國国教会は秘蹟をみとめ、その儀式をおこなっていたのだからなおさらのことである。そして、ピューリタンは、こうした儀式を国教会から一掃することを活動のねらいとしていたのである。

こうした発想で研究する者にとって、格好のテキストが存在している。それは、スペイン近代史の専門家ヘンリー・カーメンのつぎの著書である。以下、このテキストを中心に、スペインの＜反＞宗教改革について概観し、＜反＞宗教改革の意味の一端を考える——Henry Kamen, *The Phoenix and the Flame: Catalonia and the Counter Reformation* (New Haven & London: Yale University Press, 1993)。

2

この著書は、ヘンリー・カーメンの5冊目の著作であり、既刊の4著作は以下のとおりである——*European Society 1500-1700*(1984), *Inquisition and Society in Spain*(1985), *Golden Age Spain*(1988), *Spain 1469-1714: A Society of Conflict*(1991)。

わたしがこのカーメンに出会ったのは、ケベック生まれで合衆国で研究・教育をしているイギリス・ルネサンス研究を中心課題とするマーク・シェル (Marc Shell) のつぎの著書のなかでのことであった——*Children of the Earth: Literature, Politics and Nationhood* (Oxford University Press, 1993) (拙訳『地球の子供たち』みすず書房、近刊)。この第2章「共存から寛容へ、もしくはスペインのマラーノ（豚野郎）」の冒頭に、カーメンの第2作の一節がエピグラムとして使用されていた：

カスティリアは寛大な社会で、そこでは西欧の三大信仰が数世紀間にわたり共存することができたのであるが、そのような社会がどうして……、戦争のとき（イサベル女王は、闘牛でさらあまりにも凄惨であると考えた）をのぞけば、血を渴望することなど一度もなかった聖職者が、どうして、数千という同胞のスペイン人がいきながらにして火あぶりにあうのを、満悦顔でながめることができたのであろうか。（注1）

そして、奇しくもここで参考にするカーメンの第5作は、シェルの上記の著作と同年に出版されている。



ISABELLA THE CATHOLIC
The Prado, Madrid.

図 1

わたしが、このようにカーメンに出会うのは、たまたまシェルを翻訳したからというだけではない。ルネサンス期イングランド研究の流れのなかで、イサベルとフェルナンド両王（在位：1474-1504）の時代以来のスペインが、ヘンリーVIII世以降のイングランドにとってとても重要であることが意識化されてきたからである。たとえば、ヘンリーVIII世の最初の妻であったキャサリン・オヴ・アラゴンは、イサベルとフェルナンドの娘であったし、ヘンリーとキャサリンとの娘メアリーがフェリペII世（在位：1556-98）と結婚し、エリザベスI世の前の女王となっている。そして、彼女の時代にカトリック教が復活されているのである。さらに、エリザベスI世の時代に、フェリペII世の無敵艦隊がイングランド討伐の目的

で派遣されたが、敗退している。つまり、初期近代イングランドとスペインとは密接な関係にあったのである。しかし、シェイクスピア研究において、それほどこの時期のスペインが注目されることはない。いまだに、ほとんどされていないといえる。

わたしが注目するいたったのは、新歴史主義の旗手でイギリス・ルネサンス期文学・文化研究者のスティーヴン・グリーンブラットの著書『驚異と占有』（みすず書房）をわたしが翻訳するという機会にめぐまれたからに他ならない—— Stephen Greenblatt, *Marvelous Possessions*(Chicago: University of Chicago Press, 1991)。この著書は、ヨーロッパ人の＜他者表象＞をめぐるもので、この中には、コロンブスにまつわる＜新世界＞表象の問題がでてくる。実は、ヨーロッパの近代は、＜新世界＞の発見とその占有によって形成されたという観点がある。そして、コロンブスによるその発見を可能ならしめたのが、他ならぬフェルナンドとイサベル両王であった。さらに、もうひとこと付言すれば、「クリストファー・コロンブス」と一般に訳されている名の「クリストファー」(Christopher)とは、「キリストをはこぶ者」(Christ-bearer)を語源的意味としており、コロンブスの場合、このはこんだ「キリスト」とは、カトリックのいう「キリスト」に他ならない。事実、インディアスにむかったコロンブスの企図のひとつに、宣教があった。これは、以下のべるように、彼の改宗者としての立場があつてのことであろうか。

コロンブスが＜新世界＞（当初は、現在のアジアに相当するインディアスの一部

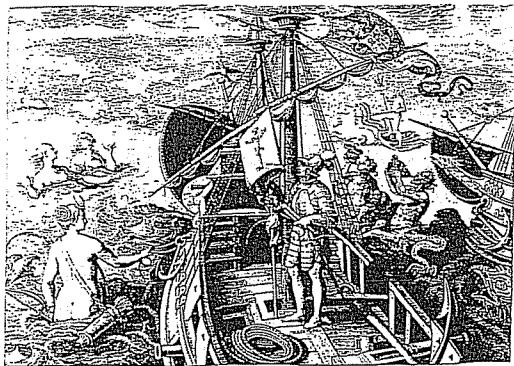


図 2

とおもっていたが、それは彼の使用した地図には、アメリカ大陸が不在であったから）に到着した年、スペインの両王は「ユダヤ人追放令」をだす。これは、キリスト教に改宗すればスペインにとどまることができるが、そうでなければ国外追放にするというものであった。この状況で前面化してきたのが＜マラーノ＞と呼ばれた改宗ユダヤ人であった。表向きは改宗するが、内実はユダヤ教を保持していたひとびとである。つまり、さきにあげたシェルの著書の第2章のエピグラムに登場する＜マラーノ＞である。この＜マラーノ＞については、日本での先駆的名著である小岸昭著『マラーノの系譜』（みすず書房）にくわしい。グリーンプラットの『驚異と占有』は、＜マラーノ＞については言及をしていないが、マラーノが多数登場するという。これは、わたしが贈呈したこの翻訳をご覧になった小岸氏の最初の反応であった。（グリーンプラット自身、ユダヤ人の家系にうまれてマラーノ的存在であり、小岸流にいえば、「マラーノの系譜」にある。）つまり、コロンブスをはじめ、彼の船に乗船して＜新世界＞にでかけた者に、マラーノが多数いたのである。

疑いもない事実であるが、1492年のアメリカ発見は、マラーノのおこなった大事業であったとかなりの程度までいえる。ふるくからのいいつけによれば、カトリック王イサベルは、宮廷の宝石（ジュエル）によって資金の調達をしたという。しかし、指摘されているように、宝石（ジュエル）のことばと「ユダヤ人」（ジュウ）をおきかえた方がより正確であるようにおもえる。現代スペインの学者たちは、クリストファー・コロンブスが自分たちの国のうんだ子供であると主張しようと熱心になり、つぎのような理論を展開している。つまり、彼は、事実、マラーノであって、その理由から、みずからのお出について彼は、やや秘密主義的であったというのである。（注2）

＜マラーノ＞の成立は、ユダヤ人追放令がでた1492年以降のことであるようにおもえるが、改宗していたユダヤ人はすでに存在していて、＜マラーノ＞ということばも存在していた。そして、彼らはスペイン社会で重要な地位につき、一大勢力となっていたようで、スペインの異端審問がこの時期に成立するのは、この勢力対策の方途としてであった。

カトリック王イサベルが王位についたのは1465年のことで、ことのき内乱の紛糾のさなかであった。即位後しばらくのあいだ、彼女の注目はもっと切迫した問題に吸収されていたが、彼女の取りまきの聖職者や貴族は、たえず彼女に、政的理由であれ靈的理由であれ、改宗者への対抗策をとる必要をやかましくいいきかせていた。そのなかの主な人物はやせた目のくぼんだドミニコ会士であった。彼の名はトマス・デ・トルクマダ、1420年バリヤドリードにうまれ、当時はその権力の絶頂にあった。彼は、女王が王女であったとき、彼女の告解師をつとめていて、ユダヤ人にたいしてはひどくきびしかった。とはいっても彼は、彼自身がユダヤ人の血がまじっているといわれていた事実があった（からであろうか）。事実、いいつけによれば、以前、彼はイサベルにつぎような宣誓をさせたという。つまり、王位についたなら（当時、とてもありそうにないことのようにみえた）、異端者の撲滅とユダヤ人迫害に全身全

靈をかけると。(注3)

また、改宗ユダヤ人の問題といえば、イエズス会には多くのそうしたひとびとがいたのである。

3

そもそも、<反>宗教改革 (Counter Reformation) とは、後年、プロテスタント化された領地に対するカトリック領邦君主の再カトリック化の試みをいいあらわすのに、法制史家ピュッター(1776)が造語して複数形でもちい、その後、歴史家ランケ(1803)が単数形でもちいたのであり、<反>宗教改革の当事者たちにとっては、<宗教改革>であった。カトリックの<改革>は、すこしづつではあったが<宗教改革>以前から存在しており、その<反>宗教改革の流れは、<宗教改革>によって刺激され加速化したともいえよう。

カトリックの自己改革は、こまかくみれば、プロテスタントの宗教改革以前からみられ、カトリック側ではその自律性を強調して、「反宗教改革」という用語を使わず、「カトリック改革」あるいは「真正の改革」と呼んでいる。また、プロテスタンティズムのことを、カトリック側は「自称改革派宗教」とも呼んでいる。(注4)

このように、カトリック側の改革をプロテスタント側の立場からとらえたい方が<反宗教改革>となり、カトリック側からとらえると内部の<改革>となるわけである。したがって、プロテスタントの<宗教改革>にせよ、カトリックの<反>宗教改革にせよ、大局的にみれば、キリスト教世界のひとつの<改革>運動であった。とはいって、この改革には、ふたつの側面があったことは見逃すことはできない。いわゆる聖職者側主導の改革と国王側主導の改革である。すくなくともスペインに関しては、後者が顕著であったといえる。つまり、別のいい方をすれば、世俗権力者（国王）の聖的権力奪取の過程が<反>宗教改革であった。

「反宗教改革」の本格的な展開をみたヨーロッパの十六世紀後半から十七世紀にかけての時代は、政治的には絶対王政が形成・確立されていった時期であるが、あたかもこの二つはそれぞれカトリック教会および世俗的権力の近世的な再編成であり、しかもこの時代において宗教と政治とは分かちがたく結びついていたから、「反宗教改革」の本格的な展開と「絶対王政」の形成・確立とは決して無関係ではなかった。(注5)

この文の著者は、この典型をフランスのブルボン絶対王政の形成・確立の過程にみているのだが、カーメンがえがくスペインの場合、事情は少々ことなる。スペインの<反>宗教改革は、国王の手によって、宗教改革の形をとり、絶対王政の形成・確立がおこな

われた。というよりも、宗教的権力の世俗化の様相を呈していたのである。

この世俗化過程に関して、カーメンはつぎのように述べている：

何ら驚くことではないが、ローマ教皇大使は、その後、つぎの意見を述べている。つまり、枢密院には、人間の姿をした悪魔がいて、イングランドのヘンリーⅧ世がたどった途を国王（フェリペ）にたどらせようとしている。（注6）

この具体的な内容は、たとえば、つぎのようなことになる：

宗教改革と反宗教改革の歴史で、国王のイニシャティヴはきわめて重要な役割をはたすようになった。国王の至上権の土台は、カトリック両王フェルナンドとイサベルが設置した。このふたりがねらったことは、教会を平穏化し、その支配権を主張することであった。（注7）

つまり、「国王ののぞんだことは、教会に規律を回復し、みずからの権威からのがれているようにみえる諸制度をみずからの支配下におくことであった」（注8）のである。この動きの結果、カトリック教会史上まれにみる事態が生じてきたのである。「国王がスペインの教会の内的生活に介入する完全な権威を獲得し、これが反宗教改革の展開にもっとも重要な要因となった」（注9）。すなわち、＜反宗教改革＞の意味していることは権力の＜移動＞であり、国王にとっては、＜改革＞を実行する＜手段＞が＜目的＞に優先した。その手段には、「助修道士に任命された聖職者の役割を変更すること、民間伝承的な慣習を抑圧すること、市の宗教的行列の規模を制限すること、田舎の聖人を廃止すること」などがあり、これは宗教的＜改革＞であるだけでなく、「社会内の権力のフロンティアに変更を加える広範なこころみの一部」でもあった。（注10）

もちろん＜改革＞は、国王側の戦略であっただけでなく、聖職者側の運動でもあった。イングランドの宗教改革は、聖なる権力を国王のもとに奪取することであり、その後、その国教体制から、カトリック色の一掃をねらう運動がおこった。つまり、体制の純化運動である。ところが、これは結果的に、国王の権力から聖なる権力を分離することになり、それがピューリタン革命であった。ある意味で、これは＜近代化＞過程の反動であったのである。同様な運動は、カトリック聖職者の間でもおこっていた。「最初の伝道師たちが、十六世紀のはじめに新世界にでかけたとき、彼らがはっきりととりくみはじめたことは、世俗の諸侯による介入の可能性から完全に自由となつた靈的構造を創造することであった」（注11）。この運動の中心にあつたのが、イグナチオ・ロヨラ（1491-1556）が創設したイエズス会（the Society of Jesus）である。このイエズス会は、スペインでは嫌われていたようである。それは、「彼らが教皇支持をすることによって、改革の大義を傷つけたという感情」（注12）からであった。

こうして世俗権力と世的権力の葛藤が生じた。カトリック王は、ヘンリーⅧ世がおこなった修道院解体のように、修道院を改革の標的にした。フェルナンドとイサベルは、

女子修道院改革にのりだし、「厳密な禁域（修道士の住居として区切った部分）」を課し、王権にもとづく公式訪問をおこなおうとしたが、反対にあった。（注13）さらに、「小規模の教団や修道院を廃止し、それを主要な教団にあけわたすことによって、宗教教団の再構築」をはかろうとした。（注14）フェリペとピウスIV世の間の対立は、つぎのピウスのことばが如実にあらわしている：

ピウスIV世は、スペインの野蛮がみずから権威をおびやかしていると感じた。「もし国王がスペインの国王であろうとねがうのであれば、わたしはローマ教皇であろうとのぞむ」と怒鳴りつけた。（注15）

国王は、＜改革＞を実行するために、軍隊をもちいて修道院を占拠し、聖職禄所有者をおいだした。実際の変化の程度は不明であるが、「イングランドの修道院解体と比較しても、不当であることはない」という。ただ、違いは、スペインで没収された財産は、教会の使用に保持されたという。（注16）イングランドでは、領主に没収されたり、祭壇の備品が盜難にあったり、ただ廃墟のままになったりしたらしい。この事情については、キース・トマスの『宗教と魔術の衰退』（拙訳、法政大学出版局）にくわしい。フェリペのとった事態に対して、ピウスV世は、「フランチエスコ修道会の第三会の会員に、その主要修道院内での限定つき自治権を保証し、その存続が確保された」。（注17）

スペイン国王は、宗教的にも＜国家＞の境界の明確化をはかろうとした：

フェリペII世のとった政策の土台は、彼の教会の権威と国家のフロンティアとを一致させようとする彼の決意であった。1560年代に、彼は、ピウスV世から、スペインとフランスの間でフロンティア領域をはっきりと分割することをなんとかとりつけた。（注18）

この過程にみられる彼のとった戦略のひとつは、外国との接触が＜改革＞にとって危険であるとすることによって、＜国家＞の境界を明確にすることであった。彼はつぎのように述べたという：

ローマにいる修道院長は、スペインにいる彼らの修道士たちの状態をしらず、おおくの修道院長はフランス人であるため信頼できない。外国人との接触によって、プロテスタントの考えが潜入してくる。不安定なフロンティアの領域にいる修道者たちは、安全にたいする脅威となりうるのである。（注19）

このような経過をたどり、国王による教会の国教化が完成する：

フェリペにとって幸運なことに、教皇は修道院の国有化に同意する意向をしめした。その結果、国王は、完全に自立した教会を統括する他に類をみないものを達成することができた。そこでは、すべての司教や高位聖職者だけでなく、すべての修道院長の任命が、国王の審査

と支配のもとにおこなわれたのである。(注20)

4

カーメンの研究的枠組みは、アナール派のものであり、その真骨頂は本書の第3章以降にみられる。つまり、第1章と第2章は、いわゆる「上からの歴史」であるといえるが、第3章以降は「下からの歴史」、つまり「日常生活の歴史」がのべられている。なかなか変化をうけることのない民衆の心性が、
「反」宗教改革によって、どのように変化をこうむつたかを追求している。第3章の冒頭で、カーメンはつぎのようにいう：

産業革命以前のヨーロッパにおける宗教は、信仰のレヴェルでは、非物質的な宇宙と関係した象徴によって、また、社会的レヴェルでは、物質的環境から生ずる行動様式によって条件づけられていた。民衆のあいだにみられたキリスト教は、教会が設定した信条と行為の体系以上のものであった。それを構成していたのは、また、公的文化として深くしみこんでいた不可視の世界と可視の世界とに関係していた、伝統的な姿勢と慣習とであった。(注21)

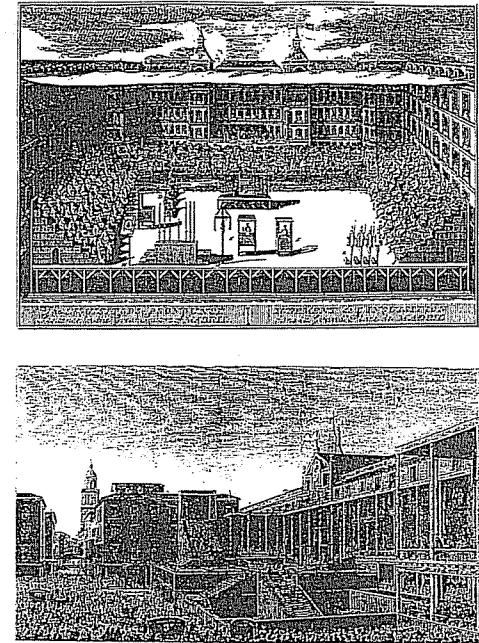
「膨大な魔術的力の貯蔵所」として体制的教会がみなされるどころか、まさしく、民衆的心理的欲求にこたえることがしばしばできなかつたからこそ、彼らは自然的なものであれ、超自然的なものであれ、その他の力の源泉へとのがれたのである。(注22)

この記述はどこかでお目にかかつたことがある、そうわたしはおもつた。引用された「膨大な魔術的力の貯蔵所」に付された注を調べてみると、キース・トマスの『宗教と魔術の衰退』からであることが判明した。そして、その前の引用文は、グリーンプラットの重要な引用源である人類学者クリフォード・ギアーズからのものであった。こうしたテキスト性を、カーメンのこの著書はもち、こうした観点から「反」宗教改革が捉えられていたのである。わたしにとって、出会うべくして出会ったという気がしている。

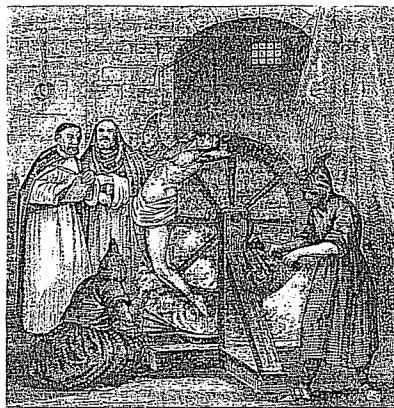
ところで、なぜカーメンは、「カタロニア」に注目したのであろうか。それは、つぎの引用がしめしているよう：

今日「反宗教改革」とよばれているものを最初にスペインでうけいれた県として、カタロニアは、みずから信仰を誇る理由があった。(注23)

このカタロニアがどうしてそのようになったのかというと、その社会が、公式的なドグマや道徳が日常生活でほとんど役割をはたしていない伝統的な社会であり、教会の結婚式や煉獄の概念がほとんど知られておらず、異端審問の支配が軽蔑されていた社会であったからであるという。したがって、こうした社会が、どのように「反」宗教改革の影響をうけていったかを調べることで、スペインの「反」宗教改革の様相が明らかにな



Two ornate and theatrical *autos de fe* of the Spanish Inquisition in Plaza Mayor, Madrid (top) and Valladolid (above)



左上・図3、下・図4

図5

ると考えたからであるとおもえる。「カタロニアの信仰と文化の再形成過程は、ながく遅々としてものであり、その当事者たち自身、それにほとんど気づくことはなかった」という（注24）。そして、「イエズス会は、十分な理由から、原型的な反宗教改革運動と考えられてきており、このことはまた、スペインにおけるその活動にもあてはまり、ロヨラは「その経験をカタロニアからはじめた」（注25）。そして、つぎのようなカタロニアの状況をこれに付け加えることが可能であろう。

ユダヤ人の金持ちは、その土地（サラゴッサ）のいちばん高位の貴族と結婚によって姻戚関係になり、貧しくなった伯爵ないし貴族で、ユダヤ人の黄金の魅力に抵抗できた者はほとんどいなかった。二世代のうちに、アラゴンにいた貴族階級の家族（王家から以下のもの）で、ユダヤ人ととの混合ないし縁組みからまぬがれることができたものはまれであった。宮廷の重要な職務の半分は<改宗者>（コンベルソ）や、その子供、さもなくば彼らの親族によってしめられていた。たとえば、1480年、国王の最高裁判所とコルテス（身分制議会）は、ユダヤ人血筋の者によって統轄されていた。状況は、カスティーリャでもほぼおなじであった。スペイン全体では、カタロニアにおいてだけ、この過程はある程度まで制限をうけた。もっとも、タカロニア人の血は、混合によって汚染されたことは決してないという誇りは、立証することはできないのだが。（注26）

注

1 Marc Shell, *Children of the Earth : Literature, Politics and Nationhood* (Oxford: Oxford University

- Press, 1993), p. 24.
- 2 Cecil Roth, *The Spanish Inquisition* (New York & London: W. W. Norton & Company, 1964, 1996), p. 208.
- 3 Roth, p. 41.
- 4 中村雄二郎「カトリック教会の改革」、『岩波講座 世界歴史14』(岩波書店) p. 446.
- 5 中村、前景書、p. 464.
- 6 Kamen, p. 60.
- 7 Kamen, pp. 46-7.
- 8 Kamen, p. 50.
- 9 Kamen, p. 47.
- 10 Kamen, p. 54.
- 11 Kamen, p. 52.
- 12 Kamen, p. 48.
- 13 Kamen, p. 65.
- 14 Kamen, p. 67.
- 15 Kamen, p. 66.
- 16 Kamen, p. 67.
- 17 Kamen, pp. 67-8.
- 18 Kamen, p. 75.
- 19 Kamen, p. 76.
- 20 Kamen, p. 76.
- 21 Kamen, p. 82.
- 22 Kamen, pp. 82-3.
- 23 Kamen, p. xi.
- 24 Kamen, p. 427.
- 25 Kamen, p. 373.
- 26 Roth, p. 29.

(本論文は、日本シェイクスピア協会刊 *Shakespeare News* (Vol. XXX, No. 1)所収の拙論「文献解題」に修正・加筆したものである。)

図説

図1：カトリック王イサベルの図。

図2：17世紀に表象されたコロンブスの図。この時期、コロンブスははっきりしない人物から、原型的な英雄=探検者にかえられた。甲冑に身をつつみ、騎士的遠征者の旗をもっている。

図3：マドリッドでおこなわれた、スペイン異端審問の飾り立てた演劇的なアウトダフェ（死刑宣告判決の公式宣言と執行）の図。

図4：ヴァリヤドリードでおこなわれたアウトダフェの図。

図5：異端審問によっておこなわれた拷問の図。

(あらき まさづみ／委嘱研究員・筑波大学教授／文学理論・英文学)